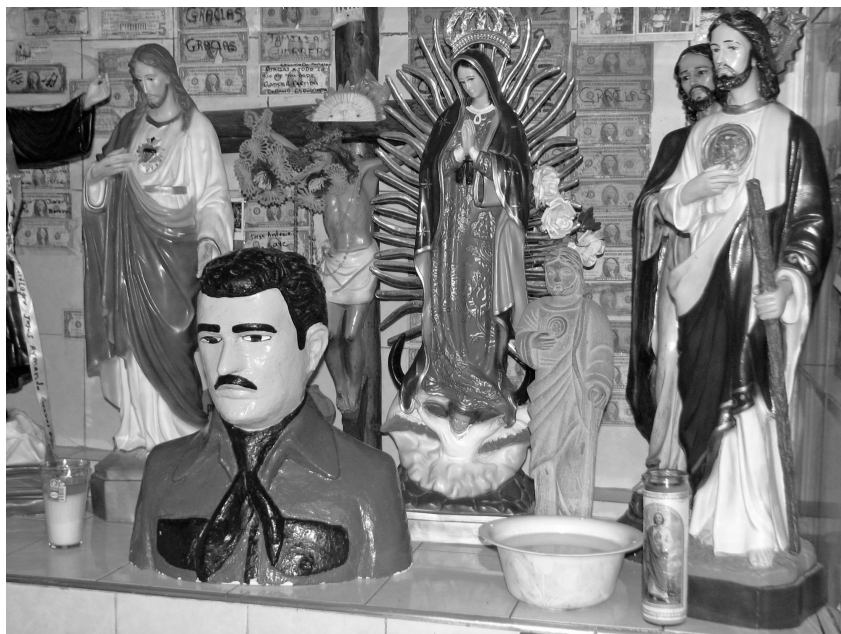


SONRISA

そんりさ

Vol.148



ナルコ・メヒコ

逃亡奴隷(The African Heritage in Latin Americaより)「ナルコの神様」ヘスス・マルベルデの像。メキシコの守護聖母グアダルーペや困難に陥ったときの守護神、聖タダイとともに祭られている。メキシコ・シナロア州クリアカンにて。

「そんりさ」「微笑み」を意味します。様々な活動を通じて、中南米の人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- | | | | |
|----|--------------------------|----|-----------|
| 02 | ナルコ・メヒコ | …… | 山本昭代・訳 |
| 06 | コーヒー物語2「サフシバン村のコーヒー」 | …… | 高木三四郎 |
| 10 | ラテンアメリカのアフリカ系-はじめに | …… | 新川志保子 |
| 13 | ラ米百景「ラ米よもやま話」 | …… | 伊高浩昭 |
| 14 | いたずら大好き ブラジルの「サシー(SACI)」 | …… | 小高利根子 |
| 15 | 音楽三昧♪「ペルー・ロックの躍進(その2)」 | …… | 水口良樹 |
| 17 | 食巡り「トマトソースのスペアリブ」 | …… | ミゲル・アクーニャ |
| 18 | ニュースクリップ | …… | サザエ |

2014年4月19日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

ミチョアカンの麻薬密輸組織「テンプル騎士団」 違法採掘の鉄鉱石を中国に輸出 軍がラサロ・カルデナス港を制圧 (下)

新聞『ラ・ホルナーダ』 ロイター、2014年1月3日

メキシコのペニャ・ニエト大統領は、昨年3月に就任したばかりの中国の習近平主席とすでに3回も会合を持っている。昨年6月、ペニャ・ニエト大統領は習主席をメキシコに迎え、経済協力協定を締結した。しかし議論の重要課題のひとつは、両国間の貿易不均衡の改善だった。

メキシコのデータによると、両国間の貿易額は2012年には627億ドルに達し、20年前のわずか4億3100万ドルと比べて飛躍的に伸びた。しかしこの数値の90%は中国からメキシコへの輸出であり、その大部分がコンピューターや部品といった製品である。

この貿易額の大部分が、ラサロ・カルデナス港を経由している。2012年、北米の主要な20の貨物港のうち、この港が最大の流通量の伸びを記録し、6メートルコンテナ(TEU)換算で120万のコンテナが積み下ろしされた。

ラサロ・カルデナス港の大部分は依然として埃っぽい更地のままで、うだるような暑さの中、タカやワシが上空を舞っているだけである。

しかし数年のうちに、(デンマークの海運会社)マースクによるAPMターミナルズと、(香港の港湾会社)フチソン・ポート・ホールディングスによってさらに多くのプロジェクトが開始され、約800万のコンテナが受け入れ可能になるまで拡張するかもしれない。これは大陸最大の貨物港、ロサンゼルスが2012年に扱った量と同じである。

しかし、ミチョアカンはカリフォルニアではない。7年前、当時のフェリペ・カルデロン大統領はミチョアカンに軍隊を派遣し、ますます暴力的になっていた麻薬密輸組織を討伐しようとした。

そのときから全国で8万人以上が麻薬密輸組織に関連する殺人事件によって亡くなっている。1年前に就任したペニャ・ニエトは、政権に就いたあかつきには治安を回復すると公約していたが、ますます信用できなくなってきた。メキシコ国内ではペニャ・ニエトが政権に就いて以降、治安を回復している地域もあるが、ミチョアカンでは混乱状態はさらに深刻化している。

この州の半分以上の住民は貧困状態にある。天然樹脂の生産のような伝統的な産業は、中国その他の地域との競争によって衰退しつつある。これによってさらに犯罪組織に加わるものが出てきたのである。

昨年10月、地元の司教はミチョアカンを「失敗国家」と表現した。その数日後、連邦電力会社の施設に数回に及ぶ襲撃があり、州内の何十万戸が一時的に停電した。大方はテンプル騎士団の仕業だとしたが、州内でギャングが張り出した告知文では、襲撃はライバル組織の犯行だと非難している。

そのすぐ後、海軍が港湾当局の指揮権を代行し、ラサロ・カルデナスの警備を強化した。地元警察官と税関職員はすべて一時的に職務を停止され、鉄鉱石を積んだトラックの列は姿を消した。

しかし、政府が港だけでなく街全体のコントロールを回復し、カルテルに支配されていない合法的な採掘業者が操業できるようにしない限り、平穏な状態が続くとは思えない。

鉱山業者らは、アルセロールミタルのような採掘権を持つ大手企業はその土地の一部しか利用しておらず、他の業者がそこで採掘するための許可を出したからないのだという。これについて同社にコメント

を求めたが回答は得られなかった。そうしてテンプレ騎士団がこの争議を利用してうまい汁を吸ったのだ。

海軍が侵攻してきた数日後、バジェホ知事は、ラサロ・カルデナスに関しては犯罪から得られる資金は年間20億ドルにのぼり、2012年度のミチョアカン州の予算の半分近くに相当しうると発表した。

鉱山業にかかわる人のなかには、テンプレ騎士団が地域を仕切るようになってから、以前より治安が良くなったという人もいる。それでも事実は別のことを示している。公的な数字によると、ミチョアカン州での誘拐事件は2013年には史上最多を記録しているのだ。

組織のリーダーのゴメスは、ユーチューブでいくつものビデオに現れ、テンプレ騎士団はミチョアカンの保護者だと宣伝している。

昨年8月に公開されたその手のビデオのひとつでは、騎士団はアボカド生産者の要請に基づいて保護していたが、業者をゆすったりはしていなかった。だが犯罪組織のなかの何人かの「バカな」メンバーがそれをやったのかもしれない、と述べていた。

ラサロ・カルデナスで騎士団がどのような権力をふるっているのか、いつもははっきりしない。暴力の危険にさらされているメキシコ北部のいくつかの地域とは異なり、この街のヤシ並木の繁華街のレストランやタコス屋やバーは、日が暮れても多くの客でにぎわっている。

住民のなかには、密輸組織に煩わされることはない、企業はゆすりにあうことなく商売ができるという人もいる。

この港町とアメリカ合衆国をつなぐ鉄道を運営するカンザスシティ・サウザン・メキシコ社の社長ホセ・ソサヤは、「われわれは1セントもどこにも払っていない」という。

しかし、騎士団に対して怒りを隠さない人々もいる。「みんな払っているが、言わないだけだ」と地

元のある企業家は述べた。「この人々は手も足も出せない状態だ」

犯罪組織は港でも活動している。カルデロン大統領の時代、この港には中国やその他のアジアの国々から覚せい剤の製造に使われる薬品が大量に入荷するようになった。地元民によると、薬品がしばしば鉄鉱石の代金の支払いとされたという。

鉄鉱石輸出に関する件でメキシコは中国と話し合ったのかどうかたずねたところ、政府担当者は「中国政府は必ずしも企業が何をしているか把握していない。海軍によるラサロ・カルデナス港の封鎖という手段が講じられたことも」と述べた。

中国外務省の華春瑩(ファ・チュンイン)報道官は、ラサロ・カルデナスでの状況についてよく知らなかったことを認め、「中国政府は自国の企業に対し、取引を行うときには相手国の法律を順守するよう、常に教育し依頼もしている」と述べた。

この地域では、中国企業が成功をおさめ、急速に成長してきた。2009年に設立以来、中国企業であるメキシコ合同鉱山開発会社は、ラサロ・カルデナスで当初3人だった従業員が全国に600人を抱えるまでになった。そのほとんどはメキシコ人だとルイス・ルー社長は述べた。ルー社長によると、30以上の採掘権を得て、会社は鉄鉱石を大規模に採掘したが、犯罪組織とは何の問題も起こらなかったという。ほかの中国企業がどうしているかはわからないが、と述べた。

しかしミチョアカンにおける中国人コミュニティの成功は、テンプレ騎士団との間で軋轢を生んでいる。8月に投稿されたビデオでは、ボスのゴメスは中国人に対して厳しい言葉を発している。

ゴメスは武装した男たちを従え、「われわれは中国人から度を越した侵略を受けている」と言い切った。「もしかしたらいくつかの企業の利益にはかかっていないのかもしれないが。しかしやつらはもうここまで来ている。そしてやつらもまたマフィアを連れてきているのだ」 (訳・山本昭代)

シナロア・カルテルはなぜ強かったのか？

“Los secretos de la expansión del cartel de Sinaloa”
Alberto Nájjar, BBC Mundo, 26 de febrero de 2014

メキシコに数ある麻薬カルテルは、常に勢力を拡大したり縮小したり、あるいは消滅したりを繰り返している。そのなかでもっとも長い間、強い影響力を保ち続けてきたのが、2月に逮捕された「チャポ」ことホアキン・グスマン率いたシナロア・カルテルである。なぜシナロアはそれほど強かったのか？ 2月26日のBBCの記事を要約してみた。この記事からは他の組織との比較はできないが、親族関係と地縁を基盤とした、きわめてメキシコ的なきずなで結ばれた組織だということがわかる。

一方、大手麻薬組織はどこも国際化し、準軍事組織をもち、多角化して、あらゆるレベルの警察・司法・政治家・公務員などに賄賂をばらまいているが、シナロアはとくに贈賄のネットワークにかけては他の組織をしのいでいたようだ。

* * *

シナロア・カルテルは世界でも最強の麻薬密輸組織のひとつで、アメリカ治安当局によると、その取引のネットワークは世界各地の50か国以上に及んでいるという。だが組織が発展してきたのはそう昔のことではない。

14年前には、メキシコにおける麻薬取引業界では、この組織はフアレス・カルテルとゴルフオ・カルテルに次ぐ3番目だった。専門家によると、今日のような国際的組織に変容した背景には多くの要因があるという。

ひとつ目はアフガニスタン戦争(2001年～)である。アフガニスタンはアヘンとそれを原料に生産されるヘロインの世界的な供給国だったが、これによってヘロイン生産が減少した。これを補うために、メキシコのドゥランゴ州やシナロア州の山地での麻薬の生産と輸出が活発化したのである。



また同じ時期、消費国、とくにアメリカ合衆国で合成麻薬の需要が伸びた。コロンビアのカルテルは合成麻薬の生産を拡大できなかったが、シナロア・カルテルはこれで成功をおさめ、短期間の間に市場をコントロールするようになった。

メキシコの市場開放により、輸出入が急拡大したことももうひとつの要因である。カルテルは密輸品をそこにまぎれ込ませることができた。

さらにシナロア・カルテルが米墨国境の主要なルートをつくで獲得するにおいて、別の2つの要因があった。さまざまなレベルの当局の保護があったこと、そして2001年1月に「チャポ」ことホアキン・グスマンが脱獄したことである。チャポはその後、組織拡大と強化に力を発揮することになる。

ナルコ企業家

シナロア・カルテル発展の秘密はこれ以外にもある。カギとなるのは、リーダーらが企業家的センスを発揮した点である。例えば、麻薬市場の変化を読み、アメリカでコカインの消費が減少し始めると、ヨーロッパやアジアに新たなルートを開拓した。同時にアメリカ人消費者には合成麻薬を供給した。

さらに国連の国際麻薬統制委員会など国際機関が、覚せい剤原料のエフェドリンなどの販売を規制すると、カルテルは化学分野の専門家を雇い、それ

に代わる新たな合成物を研究させた。また一般の多国籍企業と同様、グスマン・ロエラ率いる組織は、コカイン・ヘロイン・マリワナ・合成麻薬といった各製品の合理的な販売ルートを構築した。新市場開拓にも秀でており、世界中の国々に販売担当者を置き、適切な価格で迅速に商品を供給した。麻薬をペルーで買い付け、3週間以内にニューヨークで販売し、同時に集金も行っていったという。専門家は「チャポ・グスマンは多国籍物流企業の営業部長としてどこででも通用しただろう」という。

血の連盟

シナロア・カルテルがこの10年の間に成長した要因はほかにもある。そのひとつが、中米ギャング「マラス」やアメリカ合衆国の各都市のストリートギャングなど、それぞれの地域のギャング団と連携した点である。そしてもうひとつが武力である。この組織はティファアナやフアレスなどライバルカルテルを武力で駆逐し、セタスにはそのテリトリーであるタマウリパス州ヌエボ・ラレドを経由する密輸ルートを利用できるよう譲歩させた。

だが専門家たちが口をそろえて指摘するその発展のもっとも重要な要因は、地元当局や連邦政府の保護があったこと、そしてシナロア・カルテルを構成する各下部組織の連携の仕方にあったという。

実際、この組織のすべての幹部はメキシコ西部の出身である。ボスたちは親せき関係や代父母関係だったり、同じ村出身だったりする。1973年、コンドル作戦によってシナロアの麻薬栽培が根絶され、作戦本部をハリスコ州グアダハラに移さざるを得なくなってきたが、そののちもこれらシナロア出身者がこの組織を担ってきた。FBIはこれを「血の連盟」と呼んだが、これこそがこの組織の強みである。ほかのカルテルと異なり、各グループをつなぐものは金ではなく親族関係なのである。

専門家によると、このような組織形態は非常に有効で、おかげでほかのグループによくあるような分裂や密告を避けることができたのだという。だがチャポ・グスマンの逮捕後もこのカルテルが強いきずなを保ち続けることができるかどうかはまだわからない。(要約・山本昭代)

メキシコでは2014年2月、世界最大の麻薬王と呼ばれた「チャポ」ことホアキン・グスマン・ロエラが逮捕されました。またミチョアカンの抗争に関しては、その後3月、地元の住民が武装して立ち上げた自衛団がメキシコ軍と協力して Templar 騎士団を攻撃し、カルテルが拠点としていた街から撤退させ、さらにリーダーを殺害するなどの動きがありました。

4月の「ラテンアメリカ探訪」の集まりにて、麻薬戦争の最近の動向を含め、謎だらけの麻薬密輸マフィアの世界を、『メキシコ麻薬戦争』（ヨアン・グリロ著）の記者・山本昭代がわかりやすく解説いたします。

<http://www.ab.auone-net.jp/~tanpo/>

「メキシコ麻薬戦争の真実」

日時： 4月28日(月) 午後7～9時

会場：千代田区和泉橋区民館5階洋室D

JR秋葉原駅昭和通り口下車、駅前の昭和通りを岩本町方向に歩き、最初の信号を渡って右折。書泉ブックタワー隣り。駅から徒歩3分くらいの距離。書泉の大きなビルを目指せば、すぐわかります。

会場費：400円

グアテマラ コーヒー物語 2

サフシバン村のコーヒー

マヤコーヒー代表 高木三四郎

約10年間、コヨーテとしてコーヒー豆を買いつけましたが、1990年代の後半から、有機栽培の農産物の認証問題がおこって、買い付けの方法を変えなければならなくなりました。それまでは、生産者か流通の関係者が有機栽培の認証を独自に行っていました。マヤコーヒーの場合も、私が自分で産地の畑の土壌やコーヒー豆のサンプルを採取し、農業検査所に持ち込んで、農業反応がないことを確かめていました。一見、農業など使っていないような奥地のサンプルから、DDTの反応がでたことがありました。それは、80年代にマラリアが流行したときに蚊の駆除にDDTが散布されたことがあって、それが10年以上たっても分解されずに土中に残り、コーヒーの木の根から吸収され種に残って検出されたのです。史上最強の殺虫剤といわれ使用禁止になって久しいこの化学物質が、環境を汚染し続ける実態を認識したものでした。

有機認証については結局、生産者でも流通業者でもない第三者機関が有機認証するということになりました。この場合、生産者がバラバラだと一軒一軒の農家について認証検査しなければならないことになり、膨大な経費がかかります。そこで、懇意にしていた地元イシル出身の農業技師に、有機認証をすでに受けている誕生してまだ間もないサフシバン村生産者組合を紹介してもらい、取引を開始することになったわけです。

サフシバン村コーヒー生産者組合

サフシバン村は約1000人の住民のほぼ100%がイシル人で、標高2000メートルくらいに位置し



ています。サフシバン村の公共のものに、学校、保健所、公民館などがあります。木造の留置場が付設されている公民館は、裁判所の臨時法廷としても使われています。この公民館では、以前、組合との取り引きをはじめた頃に、集まってもらった村人の30人くらいのコーヒー組合員を前に私が挨拶したことがあります。

村には小学校が一つあって、教師は地元のイシル人で、スペイン語とイシル語の2言語教育をしています。学校の収容定員を超える生徒がいるので、午前クラスと午後クラスに別れて授業をしています。子どもは丸一日学校にいないことではないので、毎日のうち数時間は家業の手伝いをします。水を運んだり、家事や子守り、薪集めも含めて、子どもたちは農作業の担い手でもあります。小学校6年までが義務教育です。以前は村には小学校しかありませんでしたが、最近は中学校2年まで村で授業をするようになりました。中学以上行け

る子どもは通常教員資格を取りますが、そのためには町に出て高校の教員資格コースで学ばなければなりません。

保健所には、一晚、宿代わりに泊めてもらったことがあります。中にはベッドが2台あって、治療室には医療器具や薬品が保管されていて、ワクチンの接種をしたり、病気やケガ人の手当てをします。医療関係者は、常駐ではなく、決まった曜日でスケジュールどおりにやって来ます。

われわれと取引するまでは、この人たちはコーヒー生産者組合の上部団体や村のすぐ近くにあるパール農場にコーヒー豆を納品していました。このパール農場はコーヒー豆の品質が高く、国内の品評会でいつも上位に名前を連ねていましたが、その品質を下支えしていたのがサフシバン産の豆だということでした。標高の高いサフシバン村の豆は、浅く焙煎すると上品な酸味があり、深く焙煎するとうまみやコクが増してきます。ですから生豆の産地が一種類でも、焙煎の度合いをかえて何種類かに焼き分けると、酸味あるブレンドや苦味やコクのあるブレンドし、バリエーションをつけることができるのです。

日本への輸出

1991年にコーヒービジネスをはじめてから10年以上、焙煎はグアテマラで行い、真空パックにして日本に輸出しておりました。その理由は、当時は生豆で輸出した場合に、日本の港で殺虫剤の燻蒸処理が頻繁に行われていて、せっかく産地で無農薬で生産されたコーヒー豆が流通段階で殺虫剤をかけられてしまっただけでは、何の意味もないと考えたからです。焙煎コーヒー豆だと製品化されていて、パックもされていますから、燻蒸処理される心配がありません。1990年代後半までは、少量の荷物も運んでくれる船が運航しており、800kgくらいの焙煎豆を2~3カ月ごとに、船便で送っていました。しかし、1990年代の終わりこ



ろにそれが廃止となり、コンテナ船のみの運行となりました。一番小さいコンテナの積載量は生豆で17トン、焙煎豆だと10トンもはあります。一度に3トンとか4トンの焙煎豆を輸出すると、次の輸出は半年後になってしまいます。折しも、焙煎の鮮度ということがクローズアップされるようになってきて、こんな状態だと、うちのコーヒー豆は段々と敬遠されるだろうと考えました。

そこで航空便に切り替えることにしました。運賃は船便に比べて10倍くらい跳ね上がりますが、まだ円相場が高かったので利益があがると見込んだのです。ただし、日本への直行便などありませんし、一番安い路線を選びましたので、何度も乗り継ぎになり、グアテマラから出発しても、荷物が今どこにあるかさっぱりわからなくなることがよくありました。それでも10日ほどで荷物は到着するので、焙煎の鮮度の問題は何とかクリアできるようになりました。

9.11事件の影響

ところが2001年の9.11事件が発生し、状況は一変しました。乗客の荷物検査だけでなく、貨物

の中身チェックも厳重になったのです。しかも、航空会社の安全管理のコストも跳ね上がり、安い運賃の路線は廃止になるし、航空会社は大きなところもふくめて経営破綻するなど混迷を極めました。発送しても、乗り継ぎの各空港でX線検査が行われ、到着に20日近く要することもありました。船便でも25日で到着するんです。しかも、焙煎豆をパックしている袋は、光を通さないようにアルミの膜がはってありますから、X線検査では分かりにくいのか、袋を何袋も開けられて中身チェックを受ける始末です。爆弾もさることながら、麻薬探知犬の鼻をごまかすために、中南米のマフィアがコーヒー焙煎豆のなかにコカインを隠して密輸することがはやっていましたから（というか今でもやっているらしいのですが）、本当に厳しい検査体制になってしまいました。コストも上昇するし、日数もかかるし、円安も進む、で航空便の輸出はもうすぐ限界だと感じてきました。もう生豆を船便で輸出して、日本で焙煎しなければならない時期に来ていると思いました。

生豆で輸出した場合の燻蒸の問題をクリアするために、以下のとおりにすることになりました。



害虫はほとんどコーヒー豆を包んでいる麻袋に付着しているということで、リサイクルの麻袋を使用せず新しい麻袋をつかうこと。それから、グアテマラ国内ではコーヒー豆は白い皮つきで倉庫に貯蔵していて、輸出になると白い皮を機械でむいてグリーン豆にして麻袋に詰めるのですが、輸出の船に搬入するタイミングを見据えて、その白い皮をむく作業工程をできる限り搬入直前に仕上げれば、虫が麻袋に付着する可能性が低くなるということです。これで、ほぼ問題がクリアできるようになりました。生豆輸入のたびに、防疫協会に輸入時の燻蒸処理は行われなかったという証明書を発行してもらっています。

コーヒーの焙煎

次に、焙煎を日本でどうするかという問題です。ここで、私のコーヒーの師匠の話をしていきます。ロベルト・ワーグナー氏。グアテマラのドイツ系移民の家庭に生まれ、学生時代はドイツに留学していて、第二次世界大戦となりドイツ軍に志願しました。彼はドイツ語・スペイン語・英語が堪能であったことから情報部に配属されました。しかし、この経歴は氏が亡くなった後に息子さんから聞いた話で、氏が存命中にはそのことは私は知りませんでした。ある時、氏の運転する車に乗せてもらい会話をしていたときに、私が何気なく、氏の戦時中のことなどを聞いたのですが、人のプライベートのことは聞くんじゃないと、厳しい顔になり、しばらく無言になったことを記憶しています。ドイツ敗戦の後、たくさんのドイツ軍人やその家族が中南米に逃れてきて、1990年代でもまだイスラエルや国際ユダヤ団体がドイツ戦犯の追及をしていましたから、ユダヤ人迫害に直接加担してはいなかったにせよ、氏は警戒していたのでしょう。

ドイツ移民とコーヒー栽培

中南米にドイツ人が移民するようになったのは、1850年代からです。ちょうどその時期から中南米でコーヒー栽培が始まっていて、それにはドイツ系移民が深くかかわっています。1820年代から中南米の諸国が次々とスペインから独立していくのですが、植民地を持っていなかったドイツは、中南米に人間を送りコーヒー栽培につかせていったのです。グアテマラでは今でもドイツ系移民のコーヒー農園や輸出業者がたくさんあり、厳然と勢力を保っています。ある輸出業者のオフィスを訪ねたときに、何人もの社員が電話でドイツ語で会話をしていました。最初はドイツ本国と話しているのかと思っていましたが、実はグアテマラ国内のコーヒー農園主と会話していたのです。値段やその他の情報が農園の従業員や周りに漏れないようにするためでしょう。私はドイツ語会話を習っていたことがあったので、ドイツ語で自己紹介をしたら、まわりの会話が止み、視線が私に集まったことを記憶しています。

コーヒーのブレンド

さて、ワーグナー氏からは焙煎とブレンドの知識を教わりました。グアテマラではコーヒー豆の輸入が禁止されていますから、グアテマラの焙煎業者はグアテマラ産の豆を使うしかありません。一般にストレートコーヒーといわれる産地が一種類のコーヒーは、美味しいのですが、どうしても味が単調になりやすく、飽きがくるものです。そこで、同じ豆でも焙煎の深さを変えてブレンドす



れば、酸味や苦みを強調したり消したりすることができるのです。もっとも、コーヒー豆そのものに酸味がなかったら、どんなに技術があっても酸味はだせませんが。ブレンドの技術とは、大きくわけると、強調したい味覚のものを主に配合し、隠し味として対極にある味覚のものを2～3割加える方法と、2種類を半々くらいに配合する方法があります。お客様の好みも多様ですから、ストレートコーヒーが1種類というのはビジネスとしてもなかなか難しいと思います。現在マヤコーヒーでは、4種類の度合いに焙煎をしていて、5種類の味のコーヒー豆を販売しております。焙煎の技術も教えてもらいましたが、これは企業秘密です。

おわり

ここで紹介されているグアテマラ、イシル地方サブバシン村生産者組合の有機コーヒーについては以下のサイトで詳細を見る事ができます。また、電話・ファックスにて注文する事ができます。

<http://www.cafemaya.com>

電話・ファックス：0126-22-8912

ラテンアメリカのアフリカ系—はじめに

Afrodescendientes en America Latina

レコム翻訳ワークショップによる「ラテンアメリカのアフリカ系」という新シリーズを開始します。

現在の南北アメリカ大陸とカリブ海地域に住む人びとのうち実に2億人もがアフリカ系だと言われています。国により人口の多少はあるにせよ、ラテンアメリカ・カリブ全域にアフリカ系の人びとがいるのです。地域で初めての「黒人国家」として独立したハイチや、最大のアフリカ系人口を擁するブラジルなどは言うまでもなく、これまで一般にアフリカ系住民がいるとは思われていなかった、あるいはいっても非常に少ないと思われていた国にも従来のイメージより多くのアフリカ系の人びとがいることがわかっています。そして音楽や踊り、料理、宗教などアフリカを色濃く残した文化も健在です。

僅かな例外を除いて、現在のアフリカ系の人びとは奴隷としてアフリカから連れてこられた人びとの子孫です。そしてラテンアメリカの歴史で、植民地時代以降におけるアフリカ人（奴隷、ムラート、自由人）やその子孫が果たした役割についての研究は近年までほとんど存在せず、アフリカ系の存在は歴史のなかで見えないものでした。けれども、実際には多くのアフリカ系の人びとが政治的、経済的に重要な役割を果たしてきたのです。例えば、キューバ独立戦争では、独立のために闘った人びとの50%以上が黒人であり、アントニオ・マセオなど黒人将軍も2人いました。メキシコ独立戦争ではビセンテ・ゲレーロ、ホセ・マリア・モレーロスなどの英雄はアフリカ系でした。ゲレーロは黒人ゲレーロ（ネグロ・ゲレーロ）とも呼ばれ、第2代メキシコ大統領になっています。エミリアノ・サパタはメキシコでは知らない人のいない革命の英雄ですが、彼がアフリカ系だということはほとんど知られていないことです。

20世紀半ばからアフリカ系の人びとについての研究が徐々に増え、とりわけアフリカ系の人びと自身

による歴史回復の努力や、人種主義や差別に反対する運動などが展開されるようになりました。この流れの中、国連は2011年に「国際アフリカ系の人びとの年」を制定します。これにより国連機関をはじめ、いろいろな国、地域でのアフリカ系団体、グループによるアフリカ系の人びとの状況調査などさらに多くの活動が生まれました。

このシリーズでは、インターネットで入手できる資料を中心に、ラテンアメリカのアフリカ系の人びとの歴史と現在の状況を翻訳して紹介します。とりわけ、これまでアフリカ系の人びとの存在があまり知られていなかったメキシコやペルー、アルゼンチン、チリといった国に焦点をあてて紹介していきます。

最初のアフリカ人

ラテンアメリカのアフリカ系の人びとは、奴隷として連行されてきたアフリカ人の子孫がほとんどですが、最初に「新大陸」に到着したアフリカ人は、スペイン人と一緒に征服者（コンキスタドル）としてやってきました。その一人が、ファン・ガリードです。ガリードは西アフリカ出身で、ポルトガルでカトリックの洗礼を受け、何度かカリブ海探検に同行した後、エルナン・コルテスのメキシコ（ヌエバ・エスパーニャ）征服に同行し、そこに領地を得て住み着きました。ガリードはメキシコで初めて小麦の栽培を行ったと言われています。ガリードの他にも何人ものアフリカ人が新大陸征服に従事したことがわかっています。

アフリカからの奴隷

アメリカ大陸へのアフリカ人奴隷は、スペイン人による先住民への過酷な扱いや、持ち込んだ病気などにより先住民人口は激減し、また先住民を奴隷

にする事が禁止されたため、労働力の不足を補うために始まりました。

16世紀から19世紀にかけて、1100万人以上の人がアフリカ(西アフリカ、中央アフリカなど)からラテンアメリカに連れてこられました。これは米国に連れてこられた黒人の25倍以上になる数です。初期の奴隷貿易はポルトガルの独占でしたが、後にイギリス、オランダ、フランスも参入するようになります(奴隷貿易のピークは18世紀)。植民地時代初期(1580年から1640年)はアフリカ奴隷が到着したのはメキシコとペルーが最も多く、16世紀から17世紀初頭にかけての時期には、奴隷の2人に1人はメキシコに上陸したと言われています。この頃のメキシコではアフリカ奴隷の人口はスペイン人のそれよりはるかに多かったのです。

ペルーでは、ピサロにより1527年最初に奴隷が連れてこられました。リマは「黒いリマ」と呼ばれるほど黒人人口が多い時期がありました。18世紀中頃では、リマでのスペイン人と奴隷の人口比は1:34に達するという数字もあります。リマにはマランボという地区がありますが、その名前は植民地時代にあった奴隷市場からきています。現在ペルーのアフリカ系は約200万人と言われています。



逃亡奴隷(The African Heritage in Latin Americaより)

逃亡奴隷とパレンケ

新大陸に連れてこられたアフリカ人奴隷は鉱山や農牧畜、家事などの労働に従事させられました。が、彼らはなすがままにされていたわけではありませんでした。自由をもとめて逃亡したり反乱を起こしたりする奴隷も多かったのです。メキシコでは17世紀初頭、奴隷の10%は逃亡したということです。逃亡奴隷はシマロンと呼ばれましたが、シマロンたちは険しい山中など追っ手の届かない場所に逃れ、そこに集落を作ったのです。このような場所をパレンケ、あるいはキロンボと言います。現在のベラクルス州にはヤングという町がありますが、これはヤングという奴隷のリーダーに率いられた逃亡奴隷の集団がスペイン軍に屈する事なく闘い続け、ついにスペインから独立コミュニティとして認められたという町です。コロンビアでは最初のパレンケは16世紀、当時の奴隷貿易の中心だったカルタヘナ付近に生まれました。サン・バシリオという町です。現在も当時の文化を色濃く残している町として有名です。パレンケーロという言葉(コンゴとアンゴラで話されていたキコンゴという言葉にポルトガル語の影響が入ったと言われています)も継承されており、今でも住民の半分以上はこの言葉を話しています。サン・バシリオはユネスコの世界無形文化財として登録されています。

都市部の奴隷

メキシコシティやリマといった都市部の奴隷は、過酷な状況におかれたプランテーションの奴隷とは異なり、比較的自由でした。商売や手工業、鍛冶屋などに従事する奴隷も多く、儲けた金で自由を買った奴隷もいました。主人の扱いが悪いと訴えたケースなども記録されています。ファン・コレアは17世紀のメキシコで最も有名なバロック画家でしたし、19世紀リマではパンチョ・フィエロが当時の人びとの生活を生き生きと描きました。カトリック教会の信徒組合(コフラディア)を作る黒人グループ

もありました。サン・ベニート・デ・パレルモはバチカンから聖人とされた黒人でした。

黒人ミリシア

植民地時代初期から、スペイン王国は植民地領土の防衛や先住民による蜂起の鎮圧などで武力を必要としました。17世紀になると黒人・ムラート（奴隷、自由民）による民兵組織（ミリシア）も作られるようになります。例えばペルーでトゥパック・アマルの蜂起を鎮圧したのはこの黒人ミリシアが中心であったと言われています。

黒人はどこにいる？

それでは、植民地時代にそれほどたくさんいた黒人はいったいどこにいったのでしょうか。メキシコでは、ベラクルス州やゲレーロ州とオアハカ州にまたがるコスタ・チカといったアフリカ系の多い地域以外では明らかに外見上アフリカ系だという人はそれほど多く見られません。

その大きな理由は混血が進んだからです。先住民は奴隷とされないことと決められたことや、人種間の結婚が認められていたことから、戦略的に先住民女性と結婚する奴隷男性が多かったということです。そうすれば生まれた子どもは自由民となるからです。

また、ブラジルのように、ヨーロッパや中東など非黒人の移民を積極的に受け入れて国を「白く」する方策が取られた国もあります。ブラジルは植民地時代に500万人を超える数の奴隷を受け入れました。現在、ブラジルはナイジェリアに次いで世界で二番目に黒人人口が多い国です。1872年から1975年にかけてヨーロッパと中東などから5,435,735人の移民を受け入れています。これは黒い国家であったブラジルを「白人化」するための方策であったと言われています。（まとめ・新川志保子）

1646年のメキシコ（ヌエバ・エスパニーヤ）人種構成

ヨーロッパ人	13,830人
アフリカ人	35,089人
先住民	1,269,607人
ユーロ・メスティソ (ヨーロッパ人と先住民の混血)	168,568人
アフロ・メスティソ (アフリカ人と先住民の混血)	116,529人
インディオ・メスティソ (先住民とメスティソの混血)	109,042人

アフリカ系「黒さ」の違い

米国では、黒人の血が僅かでも入っていればすべて「黒人」とみなされますが、ラテンアメリカでは、植民地時代に先住民、アフリカ人、ヨーロッパ人の間で混血が進んだこともあって、どのような組み合わせの混血なのか、そして肌の色のトーンがどうなのかで、ムラート、サンボ、モレーノなど、さまざまな呼び名が付けられるようになりました。これを「カスタ」と言います。メキシコでは16種類、ハイチは98種類、ブラジルはなんと136種類もの分類があるといえます。このような複雑な分類があるため、正確なアフリカ系の人口を知ることが困難ともなっています。また、同じ家族の中でも自分をアフリカ系と思う人もいればそう思わない人もいます。また、ドミニカ共和国のように、肌が黒い人が多くても、人口のほとんどは自分のことをアフリカ系ではなく「メスティソ」と認識している場所もあるのです。

参考資料：

国連 国際アフリカ系の年 <http://www.un.org/es/events/iypad2011/index.shtml>

Afrodescendientes en Mexico [http://www.conapred.org.mx/userfiles/files/TestimonioAFRO-INACCS\(1\).pdf](http://www.conapred.org.mx/userfiles/files/TestimonioAFRO-INACCS(1).pdf)

Afrolatinos: Historia que nunca nos contaron <http://www.afrolatinos.tv/index.php?roots.map>

Afroperuanos: Historia

Blacks in Latin America <http://www.pbs.org/wnet/black-in-latin-america/>

第71景 ラ米指導者よもやま話

エル・サルバドル（E S）の次期大統領に、ファラブンド・マルティ民族解放戦線（FMLN）党のサルバドル・サンチェスが決まった。1980年代を通して内戦を戦ったゲリラの司令だった。内戦は、ゲリラ連合FMLNが首都サンサルバドル攻略の一手手前まで迫ったが、結局、痛み分けに終わった。

E Sの隣国ニカラグアのダニエル・オルテガ大統領は、サンディニスタ民族解放戦線（FSLN）の司令で、80年代に大統領となり、下野した後、21世紀に政権に返り咲いて今日に至る。改憲で無制限再選制を敷き、長期政権を狙っている。

ウルグアイの名物大統領ホセ・ムヒーカは、かつて都市ゲリラ「民族解放運動（MLN）トゥパロス」の幹部で、長い獄中生活を経験した。ブラジルのヂウマ・ルセフ大統領も、都市ゲリラ「VAR（革命武装前衛）パルマレス」の要員で、投獄された。

忘れてならないのは、社会主義キューバの元首（国家評議会議長）ラウル・カストロだ。兄フィデル前議長とともに、革命戦争をゲリラ戦から始め、武力革命に成功した。E Sのサンチェスが6月1日就任すれば、ラ米にゲリラ出身の最高指導者が5人そろふ。

チリ大統領に3月11日就任したミシェル・バチェレーは2度目の任期だが、これによってラ米に4人の女性大統領がそろった。アルヘンティーナ（亜国）のクリスティーナ・フェルナンデス＝デ・キルチネル、ブラジルのルセフ、コスタ・リカーのラウラ・チンチージャである。

かつてニカラグアにはオルテガを破って大統領になったビオレタ・チャモロ、パナマにはミレ

イヤ・モスコソがいた。以上の女性大統領はみな選挙で勝って就任したが、選挙を経ずに憲法規定で大統領になった者もいる。ペロン亜国大統領が死去したため、副大統領から昇格したイサベル・ペロン夫人がしかり。ボリビアには国会下院議長から暫定大統領に昇格した故リディア・ゲイレルがいる。

労働者から労組指導者になり大統領になったのは、ボリビアのエボ・モラレスと、ベネズエラのニコラス・マドゥーロである。ブラジル前大統領ルイス・ルーラもそうだった。

ネクタイをしない大統領を挙げれば、ウルグアイのムヒーカは絶対にネクタイをしない。相手が法王、国王、女王、大統領だろうが、開襟姿を崩さない。ボリビアのエボは、先住民の伝統的デザイン入りの詰襟服をまとう。エクアドールのラファエル・コレアも詰襟服だが、時々ネクタイをする。

軍服が好きなのは、革命軍の現役上級大将であるラウル・カストロだ。ベネズエラ前大統領の故ウーゴ・チャベスも軍服を愛した。後継のマドゥーロはベネズエラ国旗をあしらったジャンパーを愛用している。ネクタイを締め、ベストドレッサーを決め込んでいるのは、メキシコのエンリケ・ペニャ＝ニエトである。

月刊LATINA連載・伊高浩昭執筆「ラ米乱反射」は4月号（3月20日刊）が「ベネズエラ反政府騒乱事件」特集、3月号（2月刊）が「メキシコ・ミチョアカン情勢」特集です。4月末には、ローリー・キャロル著『ウーゴ・チャベスーベネズエラ革命の内幕』（伊高浩昭訳、岩波書店）が刊行されます。

日本ラテンアメリカ子どもと本の会(CLIJAL)の活動から いたずら大好き ブラジルの「サシー(SACI)」

小高利根子

今回はブラジル人なら誰でも知っている伝説上のキャラクター、「サシー」をご紹介します。

サシーは赤い三角帽子をかぶり、口にはいつもキセルをくわえ、一本足でピョンピョン歩いて、いろいろ悪さやいたずらをする黒い小人。どんな悪さかと言えば、ミルクを酸っぱくしたり、ハサミを隠したり、鍋の煮豆をこがしたり、スープにハエを入れたり…。家の中だけではありません。馬をおどかしたり、洗濯物をからませたり、鶏の卵を孵化させなかったり…。ありとあらゆるいたずらをして人を困らせては愉快なのです。

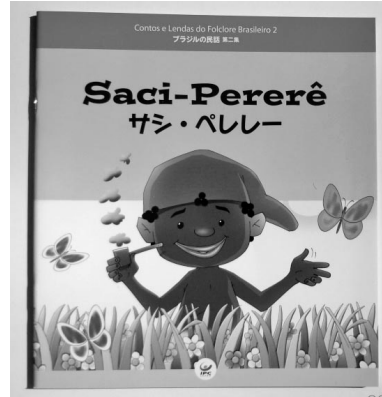
このサシーについて書かれた本や絵本はブラジルにたくさんありますが、昨年暮れ、日本でも『いたずら妖怪サッシ 密林の大冒険』の邦訳が出版されました。これは著名な文化人、モンテイロ・ロバートの絵本『黄色いキツツキ農園』シリーズの

うちの一巻『サシー』の翻訳です。タイトルは『サシー』ですが、その他にもクルピーラ、ボイタタ、牧場のネグリーニョ、オオカミ男、クッカ、水の精イアラなどが次々と登場し、ブラジルの伝説上の主だったキャラクターを一挙に紹介している感があります。

さてこのサシーはブラジル人の現代の日常生活の中ではどんな形で登場するのでしょうか？ 筆者はブラジルに通算25年ほど住んでいますが、人間関係をスムーズにするためにサシーはとても重要な役割を果していると思っています。

何か失敗したとき、誰よりも本人が後悔したり、しょげかえているはず。そんなとき、まわりの人が「あっ、それはサシーの仕業だ!」と言ってくれたら、どんなに救われることでしょうか。

ブラジル人とつき合っていると、人をとことん糾弾して断罪するようなことは極力避けようとしていることが良くわかります。こんな国民性にサシーはぴったりのキャラクターなのかも知れません。世の中には「サシーの仕業」ということにすれば丸くおさまるようなことはたくさんあるはず。本当に糾明しなくてはいけないような重大なことでなければ、せいぜいサシー君に登場してもらって「一件落着」ということにしてはどうでしょうか？



★現在入手可能なサシーについての日本語の本

①『いたずら妖怪 サッシ 密林の大冒険』

モンテイロ・ロバート作 小坂充雄訳
子どもの未来社 2013

②『ブラジルの民話 第二集『サシ・ペレレー』』

シセロ・ソアーレス作
小高利根子訳 インターナショナル・プレイ 2007

★日本語でのSACIの表記は統一されていませんが、アクセントがCにあるので、本稿では「サシー」としました。

音楽三昧♪ペルーな日々（第54回）

ペルー・ロックの躍進(その2)

さて、第52回でご紹介したロック・ペルーの続編をお送りしよう。もともとロックは門外漢の私なので、もしかしたらおかしな記述などもあるかも知れないがご容赦いただけたらと思う。ともかく、最近少しずつこういうペルーのロックを聴き始めてその面白さというものを感じ始めているので、ぜひみなさんと共有できればと思う次第。

70年代までのロック規制下でも、アンダーグラウンドで着実にその実力をつけてきていたペルーのロックであったが、80年に軍政から民政移管されると、待ってましたとばかりにペルーのロック開花の時代が訪れた。

80年代、ロックはよりポップとなり、中産階級というロックを育んだ土壌を乗り越え、人々に身近な音楽としてより広いファン層を獲得していくことになる。さらにアルゼンチンからラテン諸国を席卷したロック・エン・エスパニョールの波がペルーにも押し寄せ、チャーリー・ガルシアなどのペルー公演などと相まってペルー国内のロック・ファンが一気に顕在化していった時代でもあった。しかし、この80年代後半のペルーは、センドロ・ルミノソなどのテロが顕在化して、政情不安と経済状況の悪化が国内を混沌へと陥れ、それが90年代半ばにフジモリ政権の強権発動によって「正常化」されるまで続いた。そんななかでペルーのロックは顕在化し、市民権を得て大ヒットを飛ばすジャンルへと成功していった、そういう時代であった。

ともかく80年代のロックは、ギターとシンセが絡み合う、透明感のある聴きやすいメロディで人気となったフラヒルの「アベニーダ・ラルコ」＝写真＝のヒットより始まった。このバンドは、テレビなどのメディアのバックアップを受けてヒットを飛ばしたペルーのプログレロックを代表するバンドだ。



以降、一気に堰を切ったようにメディアに登場していったロック・ペルーであったが、その中心を担ったのはラジオであったようだ。ラジオを通じて人気を博したバンドは数多くあったが、中でも特にヒットしたバンドがリオである。よりポップでキャッチーな聴きやすいロックは、階級社会のペルー国内でも階層の上下を問わず聴かれたロックのさきがけとなったとも言われている。80年代はメディアを味方につけたロックが数多く登場した時代でもあったが、まだまだアンダーグラウンド・ロックが盛んな時代であり、同時にパンク・ロックの時代でもあった。リマを中心にペルー各地で雨後の竹の子

のようにパンク・ロックのバンドが結成された。後にソロで一世を風靡したロックシンガー、ペドロ・スアレス・ベルティスがデビューした人気バンド、アレナ・アッシュも当初はパンク系であった。

また、85年にはアンカシュの大学生たちがロックやレゲエとアンデス音楽のフュージョンさせた新しいバンド、トゥルマンジェを結成。

「ワイノ・モテ」や「リオ・サンタ」といったフュージョン・ロック

が衝撃をもって受け止められた。さらにペルーを代表する名曲の数々を取り込んだ名曲「ペルー・レゲエ」は、祖国を離れて生きる在外ペルー人の望郷をテーマに同郷人と出会ってひとしきり故郷の音楽をともに懐かしむというストーリー性も含めて秀逸な出来となっている(もともと、元曲をあくまで知っている前提の曲ではあるが)。

また、デル・プエブロ・デル・バリオもアンデス・フュージョン・ロックのバンドとして非常に人気のあるバンドだ。このバンドの特色は、アンデスだけでなくアフロペルー音楽もフュージョンしていることだ。ケーナやサンポーニャにカホンやボンゴなども取り込みながら演奏する彼らのスタイルは、

ロックという枠を越えた面白さと可能性を感じさせてくれる。

90年代に入ると混迷する社会不安を煽るように、衝撃的かつ政治的にも突っ込んだ歌詞を持つ「ラス・トーレス(塔)」がノセキエン・イ・ラス・ノセクアントス(NSQ y los NSC)によって発表された。テロに翻弄され人気はどこまでも低迷したアラン・ガルシア政権などを茶化したきわどい歌詞は、ペルーの抱える問題を描き出すことで多くの人々の共感を得たとされる。その後もよりポップに、時にトロピカルに路線を変えながらも様々なテーマで歌い続けている。私がペルーに長期滞在していた頃にも彼らの曲「パンティなしに」がちょうどヒットしていたのは良い思い出だ。

また、チチャがアンデス移民の心情を歌っていたその感覚をロックに移植したバンド、ロス・モハラスが92年には登場する。リマの貧民街でギリギリの生活を生き抜く若者たちの気持ちを代弁する歌詞は人気となり、94年以降テレノベラ(テレビドラマ)などのテーマ曲なども歌うことでさらにそのファンを増やし、90年代を代表するペルーのロック・グループへと成長していった。

一方、元来ロックを牽引してきた中産階級では、ペドロ・スアレス・ベルティスやマル・デ・コパスなどが人気を博した。アレナ・アッシュで活躍したペドロ・スアレスはソロ活動に移行した後も更に人気が高まり、数々のヒット曲を飛ばし続けている。また、マル・デ・コパスもペルーのオルタナティブ・ロックを代表するバンドとして多くの人を魅了してきた。

この時代を代表するもう一人のロック歌手を挙げるなら、ミキ・ゴンサレス=写真=になるだろうか。スペイン生まれながらペルーで育ち、ロック歌手として活動する中で頭角を現し、90年代以降はフュージョン・ロックへと次第に傾倒していった。特にロックにアフロペルーのリズムと物語性、そして

アンデス風メロディのイントロを融合させた「アクンドンウン」や、アンデス先住民が持つコカの葉の世界観を歌った「緑の葉(オハ・ベルデ)」などでは、それぞれの音楽家たちと共演する形で新たなロックのあり方を切り拓こうとした。

アンデスの世界観を背負ったロックバンドとしては、ウチュパがその代表格だ。ケチュア語でロックやブルースを歌うバンドとして、あくまでケチュア語にこだわり独自の世界を展開していった。

90年代以降に登場したもう一つのアンデス・フュージョン・ロックのバンドを挙げるなら、98年に結成されたラ・サリタだ。アヤクーチョのハサミ踊

りの舞手をメンバーに加え、アルパやバイオリンとカホン、エレキギターやベースを融合させたフュージョン・ロックの世界を追求し続けているバンドであり、近年まさに出色の曲をたくさん発表している非常に面白いバンドだ。

2000年代に活躍しているもっとも有名なバンドを挙げるならリビドーだろう。MTVのビデオミュージック・アワードのラテンアメリカ部門でも二度賞を受賞するなど、ペルー国内の枠を越えて非常に高い評価を受けているオルタナティブ・ロックのバンドだ。また、ロックというジャンルを越えて活躍しているヒアン・マルコは、ラテングラミーを二度受賞しており、まさにペルーで最もメジャーなシンガーソングライターであるといえる。

このように2000年代に入ってもペルーのロックは様々なスタイルで素晴らしい歌手やバンドを生み出し続けており、ロック・エン・エスパニョールの世界ではあまりメジャーではないとしても、なかなかどうしてしっかりと豊かな土壌を育み花開かせているのである。ぜひ、ロック・エン・エスパニョールに興味のある人もない人も一度機会があればペルーのロックにも耳を傾けてみてほしいと思う。思わぬ出会いがきっとあなたを待っていることでしょう。

(水口良樹)



トマトソースのスペアリブ

Costilla de Cerdo con Salsa de Tomate

今年のふたつめのレシピは、スペアリブを使った料理です。

日本では、スペアリブ料理をフランス料理と考えている人が多いようですが、メキシコでは国中で豚のスペアリブを食べており、スーパーや肉屋ではどこでも売っています。

豚肉やイノシシ肉のスペアリブの料理はマヤ文明の時代から食べられていました。今もマヤ民族の人々はこうした料理を食べています。

それぞれの州にさまざまなスペアリブ料理がありますが、今回は、ユカタン州の料理を紹介します。

メキシコでは、オリーブオイルや米、チリソース、フリホーレス、ワインソース、クリームとバターソース、トマトソース、アボガドのソースなどで食べたり、醤油やウスターソースやパインなどと単純に炒めたり、オーブンで焼いたり、燻製にしたりもします。



私が大学生のころ、スペアリブを食べにレストランによく行きました。家でもうまく料理できたときは、驚くほどおいしかったのを覚えています。イノシシ肉や豚肉のスペアリブの料理はマヤ文明の時代から食べられていました。

■材料 4人分

- ・肉がたっぷりついたスペアリブ 8個
- ・トマト 大2個か中3個
- ・タマネギ中 1/2
- ・ニンジン中 1本
- ・小袋のコーンチップス
- ・キャベツの細切り ご飯茶碗1杯分
- ・小瓶のハラペーニョ（タバスコなどでも可） 1本
- ・塩・コショウ

■作り方

1) 豚肉のスペアリブを鍋に入れて、肉全体が隠れるまで水を加える。ハラペーニョソースを大さじ1杯加えて、15分ほど強火でやわらかくなるまで煮る。（ハラペーニョソースはスペアリブをやわらかくする効果があります）

- 2) 肉を煮ている間に、トマトを細かく刻む。
- 3) タマネギも同様に刻む。
- 4) キャベツを、3, 4センチの長さに細切りにする。
- 5) ニンジンの皮をむき、3, 4センチの長さに細切りにする。
- 6) スペアリブを15分煮込んだら、刻んだトマトとタマネギ、細切りにしたニンジンとキャベツを加える。水が足りなければ加えて、塩コショウで味を調える。よく混ぜたあと蓋をして、さらに15分、たまに動かしながら弱火で煮込む。材料に火が通り、スープが少しとろみがでてきたら、火を止める。
- 7) スペアリブ2切れとスープを深い大皿によそって、それぞれの皿に、コーンチップスを4枚ほど砕いてトッピングする。
- 8) 白飯やフランスパンといっしょにどうぞ。

コロンビア 軍事紛争についての携帯アプリ登場

＜エル・サラードというカルタヘナから2時間の小さな村に、2000年2月16日から21日の間に準軍事組織がやってきて、住民に残虐きわまりない行為をはたらき、50人以上の人びとが殺害された＞

このようなコロンビア軍事紛争の虐殺事件について調べたり、議論したりするためのアプリが作られた。これは「開かれた真実」というグループと国立歴史的記憶センターが共同で開発したもの。アンドロイドやiPhone, iPadなどに無料でダウンロードできる。GPSを通して虐殺の場所を探す事もできるし、地図、写真、事件の詳細、被害者の名前、加害グループなどについて検索できる。ここには1982年からの700件以上の虐殺事件が登録されている。そして単に事実を知るだけではなく、新たな事実の追加や修正なども行えるようになっている。家族や親戚が殺された人は誰でも参加することができ、また、これまでこのような情報にアクセスできなかった人たちが簡単に情報を入手することができる。これら農村部で起こった虐殺事件に無関心な都市部の人びとの関心を喚起する目的もある。(BBCMundo.com 20 de marzo de 2014より)

エルサルバドル—元ゲリラが大統領に

3月9日の大統領選挙で、ファラブンド・マルティ民族解放戦線(FMLN)のサルバドル・サンチェス・セレンが右翼政党ARENAのノルマン・キハーノを僅差で破り当選した。元ゲリラが大統領になるのはサルバドル史上初めて。また前任のマウリシオ・フネスに続き、FMLNが2期連続して当選するのも初めて。サンチェス・セレンは前政権で副大統領と教育長官を兼任した。(BBCMundo.com 2014/3/17より)

ハイチ—国連報告官がコレラ被害者に補償を要請

2010年のハイチ地震の後に入った国連平和維持軍ネパール部隊により持ち込まれたコレラで8000人以上が死亡したが、これに対して国連は一貫してその責任を認めてこなかった。が、このたび国連のハイチ人権報告官であるグスタボ・ガロンは、コレラの被害者に対する補償を国連に勧告した。その報告では、ハイチの現在の問題について、ハイチ社会の大きな社会格差、大多数が経済的、社会的、文化的に困難な状況に置かれていること、刑務所の劣悪な状況、法治国家が機能していないための治安の悪さ、過去から現在に至るまでの人権侵害が放置され続けていること、などをあげている。

2013年にはハイチの人権団体や弁護士団体を通してコレラの被害者がニューヨークで国連に対して補償を要求する裁判が起こした。が、国連は外交特権を理由にこれに応じていない。(www.haitilibre.com 2014/2/26, BBCMundo.com 2014/3/1より)

メキシコ—いじめ問題深刻 被害者の6人に1人は自殺

学校でのいじめ問題はメキシコ中で起きているが、政府・家族庁の調査によると、首都メキシコシティではいじめの被害者6人に1人は自殺にいたっている。12歳以下の男女児童の17%は学校で殴られるなどの暴行を受けているという。(La Jornadaインターネット版2014/2/25)

ラ米—高い女性の出産時死亡率

ラテンアメリカ・カリブ地域で、出産10万件に対して母親が死亡する数は、一番はハイチ350人、ギアナ280人、ボリビア190人、ドミニカ共和国は150人(国連開発計画)とかなり高い。ドミニカ共和国では、そのうち20%は15歳から19歳の未成年。死亡の原因は、高血圧、出血、出産時の合併症など。この死亡率を

下げることが緊急の課題で、すでに多くの国では望まない妊娠を防ぐ、性病予防などのために性教育のプログラムが行われているが、大きな成果はあがっていない。(Noticias Aliadas 2014/3/24より)

ボリビア—変わる「チョーラ」の社会的ステータス

先住民女性をさす「チョーラ」という言葉はこれまで蔑みの意味で使われてきた。また「チョーラ」と言えば女中、というステレオタイプで見られ差別もされてきたが、今では彼女たちの社会的ステータスは大きく変わり、経済や政治、流行に影響力を持つまでになっている。山高帽子、ボリュームのあるひだスカート、長いショール、20世紀初めのテレビの時代劇に出てくるような装いのチョーラ（人々は愛嬌を込めてチョリータと呼ぶ）たちは、ボリビアの流行を推進する力になっている。

数十年前まではアイマラやケチュアの先住民女性は、特定のレストランに入ることや、タクシー、時には公共バスに乗ることすら許されなかったし、ラ・パスの中心地や高級住宅街なども自由に歩くことができなかった。が、今は自由に好きなどころに出かけていくことができる。植民地時代、スペイン人は先住民女性の反体制的な雰囲気を抑制するためにスペイン風の服を着るように強制した。それ以来、チョーラたちはそれを自分たちのものとして取り込み、好みに合わせて変化をつけ、独自の民族衣装を作り上げて来た。今ではさらに現代風にし、流行させてもいるのだ。自分たちの文化を誇りにし、自信を取り戻している。

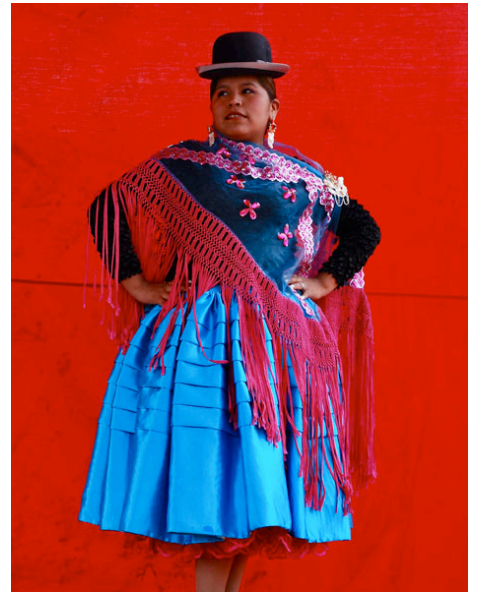
ボリビアの民衆運動が高まり、2005年、ボリビアで初めて先住民民族大統領となるエボ・モラレスが選出されたが、それがチョリータたちの社会参加に拍車をかけた。ボリビア東部の農民運動のリーダーだったシルビア・ラサルテは政権議会の議長に任命され、新憲法の制定を行った。チョリータは大学で学び、官公庁で働き、銀行員や弁護士になり、ラジオやテレビの番組に出演している。

今でも貧困や差別はあるが、ボリビア経済は成長を続け、商売をしているチョーラは豊かになり、消費に走っている。10年前には考えられなかったことだが、チョーラのアッシュンショーが開催され、ラ・パスで毎年開催されるグラン・ポデルと呼ばれる前衛的なイベントにデザイナーたちが参加し、チョーラ風の派手で豪華な衣装が披露される。裕福になったチョーラたちは着飾ることに大金を払う。大きなパーティで身につける宝石に数万ドルを費やす女性もいるという。もちろん、チョーラの間でも経済格差はあるが、その差は狭まりつつある。

チョーラの偽物も登場 最近はチョーラ・スタイルのアッシュンショーでは、実際のチョーラがモデルになる場合もあればチョーラを装うモデルが登場することもある。パーティーや大きなイベントでチョーラの恰好をして現われる偽物の「チョーラ」も増えている。

去年は、ラ・パスのアイマラ共同体のために新しい雑誌も創刊された。チョーラたちは社会的な立場を獲得してきている。2013年10月、ラ・パスの市議会は同市のチョリータ文化を市の文化遺産に指定した。

だが、この現象は女性のみのものである。都市部ではチョーラの男性版は存在しない。腕を組んで歩くチョーラの男性は洋風の恰好をしている。農村部ではポンチョや耳覆いつきの羊毛の帽子など伝統的な恰好をしている男性もいることはいるが、それとても多数ではない。(BBCMUNDO 2014/02/22より)



この1月、新婚旅行でメキシコを再訪した。彼女にとっては、中南米はもともと興味も知識もまったくなく、気に入ってもらえるか不安だった。あるいはそれは、彼女を初めて実家につれていったときの感覚に似ているかもしれない。「第二の故郷」という言い方に一人納得してみた。さて結果は…。「街や教会がきれいだった」「果物がたくさん食べれておいしかった」「(知人の)メキシコ人の家がおもしろかった」(?)など、一応選んで案内したので、まずまずだった。意外な感想としては「メキシコ料理はヘルシー」(?)。メキシコは4年ぶりとはいえ慣れてしまった自分には、新鮮な感想で気づきなすこともある。ちなみにお土産と自宅用に、留学時代になじみだったTe de Manzanilla：カモミールティー(少ない共通の好み?)をスーパーで大量に買い込み帰国した。(杉本唯史)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、
 発送は京都で 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| Vol.147 サパティスタ武装蜂起20年 | Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判 |
| Vol.146 グアテマラ視察報告 | Vol.142 サパティスタの新しいサイクル |
| Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今 | Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪 |
| Vol.144 ブラジル・家族農業の危機 | Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力 |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
 TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・
 FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

72万3132円

<グアテマラ基金>

77万8493円

(2014年4月現在)